

「ポートランドで学んだこと」(平成28年8月)

アメリカ西海岸のオレゴン州・ポートランドは、「最も住んでみたい都市ランキング」では、常に上位にあります。また、環境対策や公共交通(LRTなど)、土地利用、住民参加のまちづくり等で先進的な取組を行っており、岡山の産学官の関係者が熱い視線を注いでいる街です。岡山県立大学がポートランド州立大学と大学間の学術交流協定を締結することとなり、辻学長及び2つの学部の学部長とともに、ポートランドを訪問しました。



調印式後の懇談の場で、同大学のウェイウェル学長さんからは、交流の発展拡大に向けた力強いお言葉を頂戴したほか、具体的な取組として、同大学の英語研修への本学学生の参加や同大学のデザイン学専攻学生の本学での研修等について、意見交換を行いました。

同市への訪問は、私にとって3度目となります。前回平成27年9月の訪問では、以下のような、興味深いお話を随所でお伺いしました。

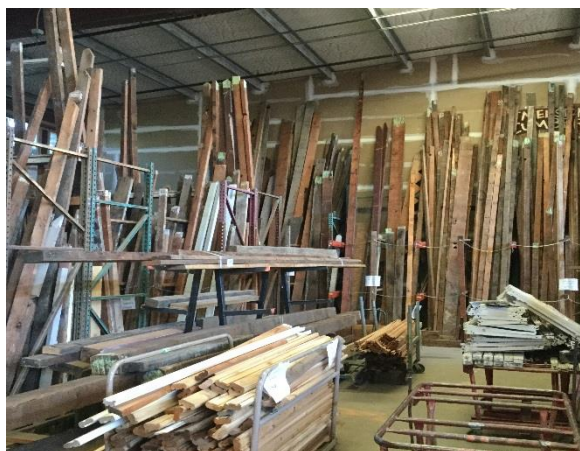
「歴史的に日本からの移民が多い地域であり、今も穀物や木材等を日本に輸出しており、日本への関心が強く、理解が深い。都市の規模、気候、インフラ、安全面等日本と似通っており、大変居心地が良い。(ポートランド日本人商工会)」

「オレゴン州は、日本語学習者の割合がハワイ州に次ぎ全米第2位と親日的。また包み紙やひもを再利用したり、料理の素材にこだわったりするなど、日本人の考え方に近く、とても肌に合う。(ポートランド日本領事事務所)」

また、オレゴン州日米協会は、1908年設立と全米の日米協会の中でも3番目に古い伝統ある組織です。ビジネス支援に加え、地元小学校での日本文化普及にも力を入れており、日本の制服の紹介や弁当の体験等ユニークな取組を進めています。昨年6月まで会長を務めておられたダグラス・スミス氏は、元岡山県庁国際交流員。「岡山では本当に様々な体験ができて感謝している。」とのコメントは、とても嬉しくお聞きしました。

ポートランドでは、ユニークな取組が積極的に推進されているようですが、2つご紹介します。まず「住宅用の資機材・器具等の再利用」を積極的に進めている団体です。

米国では古くなった住宅を取り壊す際、破壊解体する場合と、必要な木材や家具、台所・浴室等の器具などを取り出して、できるだけ再利用するケースがあります。このNPOは、再利用できるものを、元の住宅の所有者から無償で譲り受けて、半値から1割程度の廉価で希望者に販売しています。作業には多くのボランティアが参加しており、「地域にある資源（資機材や人材等）をいかに上手に地域コミュニティで活用するか」が基本理念とのことでした。ポートランドは、「グリーン・シティ」「持続可能社会」を目指しています。しかし、街の魅力により人口が毎年1万人以上も増加していることから、住宅の破壊解体も増加傾向です。そこで、「環境に悪影響がある場合は住宅を破壊解体できない」という条例の制定に関わる運動を、現在この団体は進めているそうです。



2つめは、少数グループへの支援です。ポートランドは、全米の中でも白人比率が高いそうですが、黒人、ラテン系住民、先住民、移民・難民等への支援では、特に工夫しているとのことでした。市役所で伺ったお話ですが、経済面を始め様々な困難を抱える少数グループは、かつては行政への信頼や期待の思いが大変薄く、自分たちの声を市当局に届ける、ということができていなかった。そこで約10年間かけて、各グループのリーダーを養成するプログラムを推進した、ということでした。より参加しやすいよう、研修の間は小さな子どもを預かったり、交通費を支給したり、軽食を出したり、英語が得意でない人にはスペイン語で指導するなど、様々な対応をした結果、この間に約600名が研修を修了しました。これによって行政との信頼関係が生まれ、「地域の発展のために、少数グループにも何かできることがあるはず。」と考えるようになったそうです。

岡山県には、2万人を超える外国人が住んでいます。様々なバックグラウンドや価値観を持ったこうした皆さんの豊かな知恵を、地域の振興発展のために、ぜひとも活かして欲しいと思います。